

---

# ～ 鈴の昼下がり ～

芹良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

～ 鈴の昼下がり～

### 【Nコード】

N6695F

### 【作者名】

芹良

### 【あらすじ】

猫大好きな棗鈴がある日突然猫に変身。

**（前書き）**

ほのぼの鈴視点ものがたり

長年の夢が、ついに叶ってしまった…

ベットから降りた時、最初の異変に気づく。体が妙に軽い。寝ぼけ眼で辺りを見回せば、みんながみんな、でかい。でかすぎる。（なんだ？ どうなっているんだ？）

ふと、部屋中の景色を反射する窓が目に残る。あたしは二台の学習机に挟まれた引き出しに飛びのり、窓を覗き込む。

なぜこんなに軽々とジャンプ出来るのか疑問に思うのと、

昨日の夜カーテンを閉めておくのを忘れていたと反省するのも束の間、

あたしの目はそこに移る一匹の猫に釘付けとなった。

（なんだ、見ない顔だな… 新入りか？）

左を見る。使用感ゼロの無機質な机。当然だ。あたしにルームメイ  
トはいない。

右を見る。こっちはあたしの机だ。

後ろを見る。さっきまであたしが横になっていたベット。

それから壁に掛かっている時計。

時刻は正午。すこし寝すぎてしまったようだ。

でも今日は日曜だし、別に構わんだろう。

ついでに上も。天井、それだけ。

最後に下、足元を見る。

そこには、こじんまりとした猫の手がふたつ。  
これがあたしの手だと理解するまでにしばらく時間がかかった。  
目の前までもってきて、まじまじと観察する。  
このピンク色で、ぷにぷにで、みずみずしい肉球…　これがあたしの体の一部？

もう一度、正面の窓を見る。  
そこにはやはり一匹の猫が映っている。  
徐々に湧き上がってくる興奮をおさえながら、  
あたしはそれっぽいポーズをとってみる。

手の甲で目をゴシゴシしてみたり、  
うんと背筋を伸ばしてみたり、  
むやみに手を舐めてみたり…

猫。　どつからどうみても猫。　完全に猫。

猫好きなら誰でも一度は抱く夢。

『猫になつてみたいな』

それが、突然叶ってしまった。　あっけなく。

今のあたしに「なぜ？　どうして急に？」なんて思っている余裕はない。

窓の鍵を掛け忘れていて良かったと、この時初めて思う。

あたしは窓に肉球を押し当て、ぐいぐいとスライドさせる。

休日の昼下がりに相応しい賑やかな話し声が、

遠くの方から、爽やかな風とともに流れこんでくる。

あたしは胸いっぱい息を吸い込み、  
この言い表せないほどの興奮と歓喜を、それでも何とか表現しよう

として、

「うにゃっ！」っと一声。

青空に向けて放ち、庭へ飛び降りる。

そして全力で駆け出した。

く鈴の昼下がりに

とりあえず理樹のもとへ向かおう。あいつはどこにいるだろうか。  
ぼんやりと、昨日の理樹を思い出す…

午前中で授業が終わる土曜の放課後。

暇そうなおいつを連れてあたしはモンペチを買いにいった。

安売りの店をはしごして大量に買った。荷物持ちは全部理樹に任せ  
た。

寮へと帰る頃にはすっかり暗くなっていた。

「まさか五店も回るなんて…」すっかり暗くなっちゃったね

「すまんな理樹。おまえの大切な、さたでーあふたぬーんを台無し  
にしまつて

「いいんだよ、どうせ暇だったしさ。あつ、鈴！ 空！ 流れ星だ  
よホラ！

「なんだと！ 猫になれますように猫になれますように猫になれま  
すように…」

―ははは！　鈴らしいお願いごとだね

―どうだ？　ちゃんと消える前に三回言えてたか？

―どうだろう、鈴のお願いしてる姿に見惚れてて星は見てなかった  
―なんだ、使えないやつだな

こんな感じで一緒に寮へ帰って、モンペチの山は預けっぱなしだったんだ。

理樹のことだ。律儀にあたしの代役を務めているだろう。

寮から学舎への渡り廊下、その脇の芝生で猫たちにモンペチをくれてやってるはずだ。

（昨日の願い事、たぶんちゃんと三回言えてたんだな）

なんてことを考えながら、慣れない四足歩行のポーズで学校の敷地内を駆け回る。

（むむ、やはりあたしの思ったとおりだ）

理樹は大量のモンペチを抱えて猫たちと戯れていた。

「うわあ…　あつという間に集まってきちゃった」

足元を猫に占領されて困った様子の理樹。

缶詰の詰まったビニール袋を下ろすと、そこへわらわらと猫が群がる。

「ちょっとみんな落ち着いて、今お皿に出してあげるから」

用意してきた皿に、とりあえず一缶分、モンペチを盛っている。

すると猫たちの態度は一変。一匹分のモンペチを十匹以上で争い始める。

（全く、理樹はなんて要領が悪いんだ）

猫になったあたしの姿をお披露目するついでに、ひとつ説教してやるう。

あたしは理樹の背後から一気に距離をつめ、その肩に飛びかかった。

「うわ！ なに、猫？ ちょ、ちょっと待つて…っ！」

理樹は肩に引つ掛かったあたしを両手で支えながら、足をもつれさせてよろよろ。

仕舞いにはバランスを崩して背中から倒れる。

幸い近くで寝ていたドルジがクッションになってくれたので何事も無かった。

「うわ… ごめンドルジ！ ああ、やっぱり猫か、びっくりしたあ」

理樹はあたしを持ち上げてため息をついた。

理樹の細い腕でこんなにも軽々と、まるで赤ん坊のように持ち上げられるのはなんだか癪だ。

「あれ、この猫、初めて見るな」

ドルジを枕にしたまま、じっとあたしを観察している。

「こんな毛色をした猫… やっぱり初めてみる猫だ。なんか、鈴の髪色とそっくりだ。

おまけに目の色も鈴と同じ臙脂色、しっぽにはスズのついたリボンが巻かれている…」

そうか、どうもスズの音がいつもより後ろの方から聞こえると思ったら、

しっぽの方についていたのか。

「すごい…！ まるで鈴をそのまま猫にしたみたいだ！」

理樹は体を起こし、あたしをより一層高く持ち上げてはしゃぎだした。

「きつと鈴が見たら喜ぶぞ！」

こいつめ、全く気づかないな。ひとつ声を聞かせて驚かしてやろう。『おい理樹、いつまであたしをだっこしてるつもりだ。せくしゃる

はらすめんどだぞ』

理樹はあたしの声を聞いたとたん、きょとんと、まぬけ顔になった。  
(ふっふっふ、驚いているな)

「…すごい、鳴き声まで鈴そっくり。鈴がする猫の鳴きマネそのものだ!」

『…!』

あたし、すっかり日本語を喋ったつもりだったんだが、通じない?  
こいつは予想外だ。困ったな。

理樹はあたしを持ち上げたまま目を輝かせている。  
すると、

「くう」

腹がなった。あたしの。

いくら猫の姿でも、ちよつと恥ずかしい。

そつえばもうお昼なんだ。

さつき起きたばかりだから何も食べてない。

「そつか、君もモンペチを食べに来たのか。ごめんごめん今降ろすから」

理樹はそう言つてあたしを猫集りの傍に降ろした。

うーんモンペチか…

一度試しに食べてみようとしたら恭介に怒られたことがあつたな。  
でも今なら堂々と食べれる。

あたし猫だし

のそのそと猫たちの群がりに近づいてみる。

ぐるりと一周、猫たちの周りを回ったが、隙間がない。



『ぐわ！ やばし！』  
「ちよつと！ みんな落ち着いて！」

\*\*\*\*\*

（聞き取れてしまった。とうとう、猫語を聞き取れてしまった。  
あいつら、なんて恐ろしいんだ。あんなに先輩風ふかして、威張り  
きって…）

猫たちの猛攻に襲われたあたしは逃げるしかなかった。

猫と話をするのも長年の夢の一つだったが、あんなに猫の世界が厳  
しいとは…

新入りのあたしは到底モンペチにありつけそうにない。

理樹のヤツにもしっかりモンペチの与え方を叩き込まないとないけ  
ない。

ぶらんちを取り損ねたあたしは食堂に向かつてみることにした。

当てがあるってわけじゃないが、じっとしていてもお腹はどんどん  
空くし、

とりあえず食堂潜入を試みる。

しっぽのスズの音を気にしつつ、入り口までたどり着いた。  
派手に動き回ったらつまみ出されそうだから、慎重な行動を心がけ  
る。

物陰から知り合いがいないか食堂内を見渡す。  
すると、赤いバンダナを巻いた見覚えのある巨体がひとり。

巨体は食堂のオバちゃんから山盛りカツカレーを受け取りテーブルに着くところだ。

カツというトッピングが付いているにもかかわらず、更にそこへウインナーやらコロッケやらをのつけちゃう筋肉もりもりな生物。

間違いなく、真人だ。

あいつから何か貰おう。

お昼時とあつて食堂内は混み合ってる。

あたしは疾風のごとき身のこなしで（猫の体は慣れると実に動きやすい）

誰にも気づかれる事なく、あつという間に真人が付いているテーブルの下へとたどり着いた。

（ふっふっふ、夜な夜な恭介たちにミッションを課せられてきたかな、

潜入にはそれなりの自信がある。おまけに体は猫。今のあたしは伊達じゃないぞ）

「ふー、やっぱ日曜の昼はがつつり山盛りカツカレーに限るぜ！  
いっただっきまーすっ」と

頭上から真人の独り言が聞こえる。

続いてカツカツとスプーンで皿を突く音が響き始めた。

（おまえ、カツカレーは年がら年中食ってるじゃないか…）

さて、どうしたものか。

こいつが今のあたしを見てもあたしだなんて気づかないだろうし。  
いきなり現れた猫に食い物を恵んでやるほどのヤツとも思えない。  
むしろつまみ出される。

…やはり隙を見計らつての横取りしかあるまい。

そうだ、猫の世界は厳しいんだ。  
食える時に食っておかないと。

あたしは椅子から伸びる真人の両足の間に身を入れ、上を見上げてみる。

椅子とテーブルの天井。その隙間に真人の顔（主にアゴ）を見るこ  
とが出来る。

スプーンが真人の口へ忙しくカレーを運び、

真人のアゴはダイナミックに上下する。

滅多にないアングルなもんだから、その迫力はひとしおだ。

真人が座ってるテーブルには他に誰もいない。

暗黙の了解で、昔からあたしたち専用のテーブルになってるからだ。  
これなら椅子まで上がっても見つかることは無さそうだ。

あたしは真人がソースに手を伸ばす瞬間を見逃さず、  
その隙に真人が座る椅子の隣へと上がった。

真人はカツカレーに夢中だから、すぐ隣にあたしがいても気づかな  
い。

あたしは真人が大事に取っておいているのであろうカツに目をつけ、  
くすねるタイミングをじっと見計らった。

（あ、水をガボガボ飲み始めた。今いけるか？）

（ウインナーが皿からはみ出てるな。取れそうだなぞ…）

（食うの早いなこいつ、ちゃんと噛んでるのか？）

（やっぱりカツは少しづつ食べてる。最後のお楽しみというわけか）

なかなか決定的な瞬間が訪れず、じれったい。

モタモタしていると全部食べられてしまう。

もはや石橋を叩いている場合では無いな。

しかし隙が無さすぎる。

ていうかこいつ、皿に顔近づけすぎだろ…

その時、

突如食堂内がどつと沸き、がやがやし始めた。

真人もスプーンを置きすくと立ち上がった。

（なんだ！ どうした？ 見つかってしまったか？）

恐々真人を見上げてみると、上半身をひねり後ろを見ていた。周りを見ると、他の人間もみんな真人と同じ方向を見ている。

（なんだよかった、あたしじゃないのか…）

ひとまずほっとし、あたしも食堂中の視線が集中する所へ目をやる。

何やら人垣が出来ていて、あの後ろ姿は…

恭介！？

それに謙吾の横顔と、おそらくクドのマントであろう白いヒラヒラが確認できた。

ここからでは何が起きているのか分からない。

耳を澄ましてみる…

「この限定販売の揚げパン、たとえ宮沢さんを敵に回そうとも引き下がる訳にはいきません！

小毬さんに買ってきてあげると約束してしまったのです。

普段お菓子を頂いてばかりでは申し訳が立たず、何かお礼が出来ないかと思っていいたら、

なんと小毬さんは揚げパンが大好きだということじゃありませんか！

しかし学食で時々出るこの揚げパンは大人気で入手困難！

小毬さんは滅多に食べることが出来ません。

そこであたしが全力で小毬さんの為に買いにきたのです！」

揚げパン？

パンは購買部の方じゃないのか？

…いやまて、そういえば学食で時々本格的な出来立て揚げパンが食べられると聞いたことがあるな。

今日がその販売日だったのか。

むむ、今度は謙吾がなんか言ってるぞ。

「それで理樹の所へ行ったら猫たちに餌をやってるじゃないか。

今日は一緒に早くから並んで揚げパンを買う約束だったんだ。

しかし理樹は多忙な男だ。俺もその所は考慮してやらねばなるまいと思ってる。

だが、たとえ一緒に揚げパンを買えなくても、俺が二人分買ってきて一緒に食うことは出来る！

それでいざ売り場に来てみたら、あと一つしか残ってないじゃないか！

俺の分はもうどうでもいい。ただ俺は理樹に上手い揚げパンを食わせてやりたいんだ！」

なんなんだ謙吾は。半分やけくそだな。

あいつとんだけ理樹のことが好きなんだ。

それと理樹はあんまり揚げパン好きじゃなかった気がするぞ。

「なるほど、二人の言い分はよく分かった」

今度は恭介の声だ。

何であいつが仕切ってるんだ？

「ここは公平にジャンケンで購入権を争ってもらって、と言いたいく所だが…」

うちのバカ兄貴はまた何を言い出すんだ？

恥ずかしいことはやめて欲しい。

「ジャンケンじゃ味気ないからな、やっぱバトルに限るぜ!」  
とことんバトル好きだなあいつは。小学生みたいにはしゃぎおって  
周りも周りだ。なぜこんなに盛り上がる。  
となりの真人も心なしが鼻息が荒くなっているようだ。

「よし! お前ら武器だ! 武器を投げ込め!」  
恭介の一言で食堂は一気にヒートアップ。  
もはやここは食堂ではない。

(うわ、サッカボールが飛んできた!)  
(ゲームキューブは投げるもんじゃないぞ!)  
(蓄音機なんてどっから持ってきたんだ?)  
空中に森羅万象が飛び交う。  
危ないっいたらありやしない。

「うわやべえ! 俺も何か投げねえと!」  
隣にそびえる真人がそわそわし始めた。  
何を焦る必要があるのだろうか。

「えーっと、ぶきぶき、武器になりそうなもんは… あー! カツは  
ダメだ!」  
ひどい慌てようだ。

武器を投げ入れるという行為はこいつにとっての何なのだろう。  
「ああくそ! ろくなもんがねえ! …って、ん?」

しまった!  
ぼーっと真人を眺めてたら目があってしまった! 何たる迂闊!  
真人の口がニヤリと綻び、あたしに向かって腕が勢いよく伸びてく  
る。

(やばし! 逃げられ…)

つかまった。

首根っこをつかまれ、だらしなく持ち上げられる。

「なんていい猫だ。武器にぴったしじゃねえか！」

『こら！ 猫は生き物だ！前にも同じことがあつて懲らしめただろ！もう忘れたのか？ こら！離せこら！』

「おうおう威勢のいい猫だ。待ってるクー公、こいつがあれば謙吾はイチコロだ！」

（あ、こいつ一応クドのサポーターなんだ…）

なーんてのん気なこと考えてる場合じゃない！

このままだとあたしは放りなげられて、空中を他の様々な物と共に漂い、

それは目を回してしまうような恐ろしい体感で、それからどこかの誰か、もしくは床に激突して…

そこまで考えた所で、

不意に強い重力を感じ視界が大きくブレた。

（うわ！ 真人、振りかぶりすぎ…）

「いつくぜえ、うおりゃああああ！」

掴まれている感触がなくなり、もの凄い風を感じて、周りの景色が捉えられなくなる。

『ううにゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ…！』

「……ん」

(…うん?)

「……ん！」

(あれ、なんだ?)

「……り……！……ん！」

(これは…理樹の声?)

「…ん！りん！鈴！」

(あ、やっぱり理樹だ)

ほっぺに温もりを感じ、自分が少しづつ覚醒していることを知る。再びまどろみに飲まれそうになるのを堪え、ゆっくりと目を開けてみる。

「鈴！鈴！大丈夫？何か唸ってるよ？鈴！」

「ん、んー… 理樹か。………… あれ？」

あたしのほっぺに当てられた理樹の手に触れながら、目に飛び込んでくる色彩の形作るものを確認していく。

「………… あれ、ここどこだ？芝生？」

「うん、食堂からの廊下。その脇の、鈴がいつも猫と遊んでるところだよ」

目の前にある理樹の顔は何だか不安げだ。

「鈴大丈夫？ 猫と一緒にゴロゴロしてると思ったら、いつの間にか寝てるんだもん。」

しかもうなされてたよ？ 変な夢でも見てたの？」

ああそうだ。

だんだん頭も冴えてきた。

今日は日曜日。

昨日理樹と一緒に買ってきたモンペチを猫たちにくれてやる日だ。

あたしはとりあえず猫とのスキンシップを図って、

いつの間にか寝てたみたい。なぜ昼間っから眠くなったのだろうか。理樹の言うとおり、あたしはうなされていたようだ。変な汗をかいている。

「なんか嫌な夢を見てたみたいだ。けど大したことはない」

「そっか、良かった。モンペチは一応僕が適量だと思う量をあげて

おいたよ」  
「悪いな」

傍らで膝立ちの理樹。手には痩せたビニール袋が握られている。  
あたしは体を起こし猫たちに向く。  
まだ食事中のようで、もふもふした塊が皿を取り囲みもぞもぞ動いている。

その脇で、ちょこんと座る毛並みボサボサの猫が、一匹。

「ん？理樹、なんだあいつは？ 見ないやつがいるぞ」

「あれ？ほんとだ。 野良猫かな」

「いや、新入りだ」

そうだ。

なにやらぼんやりと思い出される。

猫の世界は厳しい。

世話をしているあたしたちが気を配らないと痩せ衰えた猫が出てきてしまう。

「理樹、こういう猫のためにも餌のやり方はちゃんと考えないとダメだぞ」

「え？ う、うん。 そうだね。 もう少しお皿が必要だったかな」

「それと」

「…なに？」

「寮に帰ったら、真人に蹴り入れておけ」

「え？なんで？」

「なんでもだ」

あたしは理樹のビニール袋からモンペチを一缶取り出し、立ち上がる。

ボサボサ猫の近くへ歩みより、目の前で缶を開けてやる。

猫はそろそろと近づいてきて、やがてペチャペチャとモンペチを食べ始めた。

「よしよし、うまいか？お前たちの世界は思ってた以上に厳しいんだな。」

「いっぱい食べて、頑張って生きるんだぞ」

(了)

## （後書き）

リトバス！}after story}のほうが連載途中ですが、  
一話完結の短編を書いてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6695f/>

---

～ 鈴の昼下がりに～

2010年10月14日20時53分発行